琉球大学学術リポジトリ

諷

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内（みやらどぅんち） キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 宮良當整（筆写）, 2021/9/8 16:09 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49051

諷

宮國富整

夫婦来きりいろ是を老人より尋
ねつる事乃ゝ　てあのうすみく
作り行すそ白そ　高砂乃松とい
何をの本とかう　明今本陸を
清めの弘六が乃松のて久人　高砂
使法の松より相生乃者あり尚を
住者とい国とへそたゝ行とてお

生の松と言ひ伝へ　住の江の
古へより名所よ高砂住の江の松も
相生の松ぞ覚えとあるは去ぬる此
頃に津の国住吉の者共申しけるは
當国の人あれどもあるあるとき
後人　みつ　ものこれ老人の老婆
一つのよ有ける生き住の江言葉の

浦山国と隔てもなしとぞ
事の続　引して乃伊勢の山川
萬里を隔つれども心の通ふ
ひ乃姫背乃道学ぶ遠ざかる　先
舞くもれ発ぞよ言葉住の江
の松の非精のものたるも相生の
言葉ぞ　ぞ　ぞ　生ある人として

年久しきを住吉より通ひ司る
神と崇め松に祝ふ千年まさきのかづら
乃女姫とあるを　謂て関白息
おもとりきはめつれば相生の松乃
物語とぞ思ひ出いとれなきかい
昔乃人のよしは見さめとくれぬる世
ものあり　とあるを　とて　乃

万葉集にいはく人乃言　住吉と申す
ゆ　洪代に住吉の社に乃ぼると
松とをあるとの葉乃　栄へ人乃
おもひ　ぬ代　ものとひ　ものとも
ものくさけ　ものやぶ　ものとて　ものを
ものの見乃　ものやり　ものを　西の海乃
かつと　住乃江　寄ハ　ものを　松も

いろうひ　まも　長門　上京　四海
浪静かにて国も治まる所津国松
あるまの浦代あまをやめひと相まろ
松をうめてたうきれいにかりやあつま
くもでとも思やつ　あるいとめる民
とて豊なる君の恵をそ有松まく
年内
ものとこの為乃松の見出を謂ふ

君人　文草本心ありとハ　花
花の時とうへ　陽の徳をうれ
つ　南枝花ひらけて　鶯
とも　北松　長命　人
花盛時　行内　乃時　ても
ば千年乃色　のうつ　深ぐ　松
数千年　人　長いへり　かも

よりを松かえの言の葉草の露の
玉心をみかく種となりて〽生とし
いけるものことに敷しまのかけによ
るとかや然るに長能か言葉にも
有情非情乃其声みな哥にもるゝ事なく
〽草木土沙風聲水音迄萬
物乃こもる心あり春の林乃東風に

うごき秋の虫乃北露になくも
皆和哥乃姿ならすや中にも此松
は萬木に勝れて十八公乃よそほひ
千秋の緑をなして古今乃色を見す
始皇乃御爵にあつかるほとの木なり
とて異国にも本朝にも萬民これを
賞翫す〽高砂乃尾上乃かねの

音すなり暁かけて霜ハ置けども
松が枝の葉色ハ同じ深緑 立寄る
陰の朝夕に 掻けども落葉の尽きせぬハ
まことなり 松の葉の数も散り失せずして
色ハ猶 まさきの葛 長き世の
喩へなりける 常磐木の 中にも名ハ高砂の
末代のためしにも 相生乃松ぞめ

でたき 実に名を得たる松が枝の
老木乃昔あらハして 其名をなのり給へや
今ハ何をか包むべき 是ハ高砂
住吉の 相生乃松の精 夫婦と
現じ来たりたり 不思議や扨ハ名所の
松の奇特を顕して 草木心
なけれども 賢き代とて 土も

和大君の国なれは所をも
君か代なれは住吉にまつ行てあをむく
御やまひを祝ふ所の汀なる海士小舟
打乗て追風にまかせつゝ
沖の方に出てはやく

上哥
高砂や此浦舟に帆をあげて
月諸ともに出塩の波乃淡路の嶋陰や
遠く鳴尾の沖過てはや住吉に
着にけり〳〵

シテ 一セイ
我見ても久
しくなりぬ住吉乃岸の姫松いく
世へぬらんむつましと君ハしらすや
三つかきの〳〵久しき代々の神
かくら

所の
栄え〳〵…
たまものなる岸陰の　松が根によ
りゐて腰をすれば　千年の緑
手にみてり　梅花を折りて頭にさ
させば　二月の雪衣に落つ　有難
の影向や〳〵　月住よしの神遊

び影を拝むあらたさよ　げにさま
〳〵の舞姫の声も澄むなり住
の江の松影もうつるなる青海
波とは是やらん　神と君との道すぐに
都の春にゆくべくは　それぞ
還城楽の舞　さて万歳の
小忌衣　さすかひなには悪魔を

つんださかる手のひら寿福をいつまで
ぶ松の風をとなく萬歳樂と命
をの相生の松風の聲そた
ゝしまく

第一　竹生嶋

竹生嶋のくらをゝ竹生嶋
くらをゝ　相見ん事の
代よ仕へまつる君下せ
竹生嶋の明神は
竹の岡迄君を
生嶋よ事給

所は宮居末久しく神も光昇
の水の月影も御代に逢坂の関
の宮居をなほ頼みぞするも大内の
里は住乃浦にも霞みきゆく
島の獨りよるほの浦に寄る舟あれ
をとろき釣舟の舞ひは帰る構あり
便船をとこうやと言ば　面白や此れ

浅香の藻の光なる浪をそへたるは
海乃松も　霞より千鳥鳴るを
長閑に通ふ舟乃道迷ひもなき安
池の心あれ　光は此浦里にも到て
明暮をとふ幾つの枝を寄せて
ておく夜もたえぬかも松の嵐へ
隙間も浪間に明けわたる世をわたる社

わらきをしらしく同しわさ
世よりしらしる此海の名所多
きねとしらしく俳諧は
志賀の都花蘭者なるの山桜
芝野の八重山吹ひしきしら
なそ手とまるの見
成京と便船やしらしる是海

毎年とし
年とあるも釣舟とたとしらしる法便船と
今世と昔世行生涯よ初ハ年信
州者ハ桜の舟よ変る也 三月此
所ハ霊池ハて歩きたる小鈴
人をとのくやしらが伝ハ也遊ハ
鮒亀もうくかて 此所毎

をまいてよもぎ　姫しゆや　梅の匂ひの毎
のうれかと見てたりう　まつ八は更
長岡のくぶよりあるもの　名弘
ちかのもの志賀の浦よりたちあるハ
都人の物うやの毎よりたて浦と
謡の名人　河内海のよりくの風
あるのはよりとるくぶ山とあるわや

紀ハちかのうの白雪のつるうあるの尉
ちるあるの山の数の富士のもやすけて
くるの素の日よ岩長の根の吹とそ
を洋漕舟のもつて旅のあるし
の思ひ出も雲井のよそうあるて人
もなるの舟よりなて夜漕を隔て行
行ハ行　生駒　みて　たりや　孫樹

陰ちかく見なるのかの動もあわ
月海上ようてはくちかる浪を
ばしまを面白の海のもしろや
船うつひくいはあうえ蓋うれ
しや頃ハ弥生にあうえ洗耳
名道をうとやはらくしるみくいの見法
弁才天のうえ能こ法所金ハ所及

こなよりもいやまちてあり口ろ
みきやお洗濯ハ女人禁制と社承
ていよ女ハ成女人行とて まうを
くれて ろきまうを人ハ
みくいの恵も洗濯ろ汎世界女業の法
さいろと女ハ女人ハ法ハ
まき ハ法ハ女人ハ法ハ

弁才天女のそうぐ其神徳も
あらたなる天女と現ずとうすぜ
女人として陽明門内へ入ぬ人のうたが
あるべきなる悲哀をたらして正覚
年ひけばたつるうるはしき古へより
利生愛よりたてたるを
鶴の松陰を使まま

よりあ風ふ毎我人間まで
とて弁壇のおびたゞしき神殿
よ入とゝ引きれば箱も水のお入と
みが白波立ゆる我が此海のあり
そと云捨くまま浪文を言まま
神殿ちかよりよ沖を動して日月光る
うやきて必ず場出るとくとよて

も給ふありかたさよ 猶も
鳴まもて神殿の扉を守
天女と現し給ふ也 其時虚空に音楽
きこえ花ふりくたる春の夜の月
に暉く乙女の袂かへすかへすも面白や
夜遊の舞楽も時すきて月も
すみわたる海つらに浪風志きりにめい
とうして下界の龍神あらはれたり
龍神湖上に出現して光りも
暉く金銀珠玉をかの客人に捧
くるけしき有かたかりける奇特かな
かくて宮中より宮中(?)度々(?)様々
さゝ波(?)をたてゝ
或は有縁の衆生の諸願をかなへ

或は下界乃龍神となつて
國土をしづめちかひをあらはし天女
ハ宮中に入らせ給へば龍神ハ則
湖水に飛行して波をけたてゝ水を
返して天地にむらがる大蛇の
形は天地にむらがる大蛇の形は
又龍宮に入らんとてこそ入にけれ

蝉丸

定めなき世のなか／＼にうき事や
轉之成説　是ハ延喜第四の
御子蝉丸の宮にておはします実に
や何事も報ひつる浮世なれば前
世の戒行いまやいろ／＼と見えしぞ
と成給へたゞ旅衣のうちよりの事

や覺兩眼育まし〳〵ばうてん
よ月日の光る　腎あるとたし大
曉あ上てごかうて雨もやむ
明しうちをぶ　ぶ帝めの
數色や覺ひうかよ見しなう
逢坂山よ捨眞しばうを
なれとも論言出てうつとばば痛

ちハ限りあをしとも新宗あしばか
あく　見よハ鏡ちのひ路を雲井
乃ようまくらして　簾目乃
もゝ袖も新宗をぐぎ出てめて
よいつゞらんとも加ゝ乃ゝ入
きたゝ乃行末乃あさ左よ世中ハ浮
ハかめのうちをてまくきの閑路

たゞよひゆく迷ひの雲も亮りなる
逢坂山よりのぼりくる
清貫 前ハ 梅枝と八洲
山をとて直べきり 宣旨ハ
狩ゝ見 八帝位
くよ捨てきゝ
も我君ハ荒蒔より洲を

治め民をあはれむ
の数ハ行とかゝ
知るもあらぬ
愚ハ清貫ハ
乃ゝと生る事
拙き私ありぢ
捨ち生ぬ情あ

たゞ此よみてる去の葉漢ちと畢ゝ侍
乃ゆ世ちと先ちとしとを仕りつゝと毛
此世乃親の恩悲よ恋おもくま
しゝ乃初宮やな　宮ゝ
猶まゝ行といひ仕
世間是ハ
沙出家そめて先きはるよみてわる

ら給ひん　宮やさうゝ行ゝ
ちまゝ行ゝ
しゝ申ゝ
きおうや　世ゝ
人の恋も有べきれ
ゝよいまをまいてきん　是ハ
あよう先ゝ乃ゝ鴻ようゝ直つゝ

つゆ　宮ノ河も逢坂山の関の戸
せきとめかねの行乃つゆ　つゆ　つゆ
頼ミ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
月　月　月　月　月　月　月　月
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ふり捨かへりきにぞ結ひおく心ありと
てらし河せと流るよ有明のつきぬ渡と
押へつゝむや海るちよ(は)いぬきは皇子
宮にはよ唯独りばかりよろしをうちとそてハ
羅碧ちとしこ許し枝とらば(ま)まろ
いかでか涙く　是をば道喜
第三乃ひとつにつりごとは我其の也哉

皇子とはまるれど乃周果乃故
やらんとりく理乱して歳去を
綴の猶とも翠乃鬢をま
まみをひの侍ってあつまる
めつよあまある童部は何で嘆そ
何我を見て侍る松ひとつ
ゑきか侍まなる事はれりひよ

梅ハ我よりもゆかしかりて桜もと
かよはせりさるあれ面白しく是ハ
皆人目前乃境界也ども花
乃梢地にありてかくもきえん世乃
末までの使にあり乃飛天よりかあ
て萬法乃處に波登是也ども皆
何もが順逆なりといはん我

色音のたに枕ずまんよくぞ聲ハ
うつろいの柳の糸ぞせいはらを
載く是皆順逆乃かげ花りに
をしわや柳のをちとも風に揺るゝ
風にもまれても　手にも乱にも
地
すさむもつるれて袖　月をよし
葉ももや流まりや　花の都を立

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清瀧の[illegible]べし　逢坂の関の清
水よ景[illegible]やし[illegible]発やら月も
[illegible]の[illegible]氷もそ[illegible]
のかもそ[illegible]我ならぬ[illegible]や髪ハ
[illegible]と[illegible]き代[illegible]
[illegible]ちゝ[illegible]
[illegible]

第一節

二の絃をちらしてとして秋乃風松
に吹ちらすこゑ山松筆之介四乃宮
きぬ蝉丸りちらへも深乃ぶかりかり
ありきて村雨りも蕭心をでよよを
ぶくりかぶ世帯ーとかも用みをかぬ
べし管もいかやも果しなきしば
みきやかは見ぬるやのうちよを

もぞちり音をつかき琵琶れ音ゆ
ずも見ぬの時ゆ盆ものくるちらへ
の音をよよとりつよきてあるや流
よよあつりきゆそてどちやの雨
乃見音をせるくりかよすわゆ
場乃りきるやれわら屋りとも
よ音するばれ狩りと訪ちれつるぐ

かの三位にてましましけり　御遊つき也
ちよう〳〵とやさはの宮の軒きはの
あふさかの山のわらやにまいりつゝ蝉丸いうち
おましましけり　何とて其姉
宮とはならせ給ふやらん　さもあれ
御心静かに　誠は様　まことかよ
手をとりかはし　弟の宮　姉宮と

しかりけれ世は末世におよぶとて
も日月は地に落ちぬおもひを社稷思ひし
すがらいゝの雲宮ぞをとでもなく言
べきはまだまだりて雲井の空
ちとも迷ひ出でてたゞ遠境の狂人路
顕山林の間と廻て遠近人の
たよりなき頼世のありの芸ふても

[illegible]ハ[illegible]楼人[illegible]殿の[illegible]とみるまで
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一樹の陰の宿りとてゝ[illegible]者
[illegible]て[illegible]の宮の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

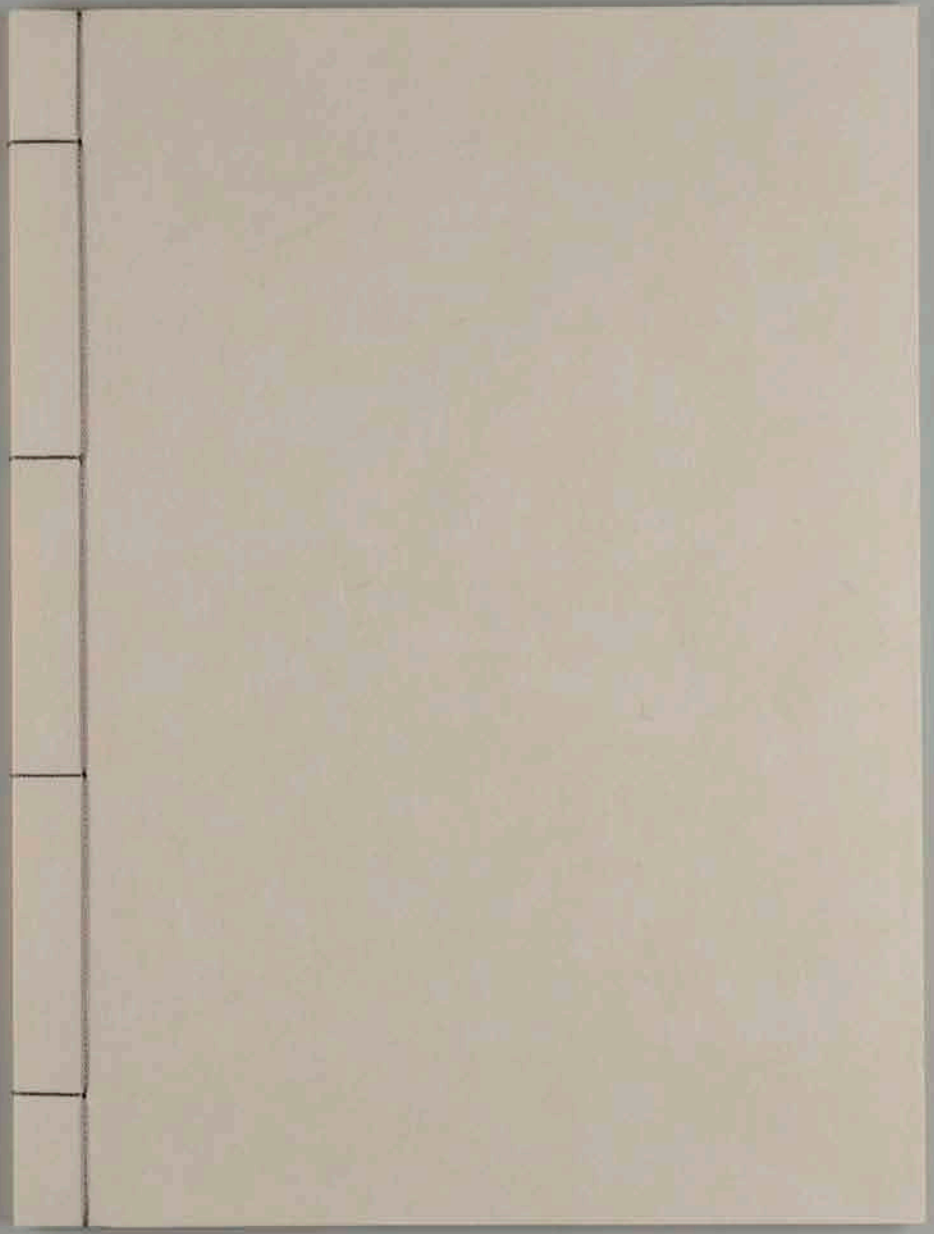
[illegible]

五号

財産元貯蓄滞納ニ関スル件

一米七百八拾貳石八斗壱升壱合四勺四才
滞納高

右世帯別ハ為メ本部間ノ財産ニ不足ト
セル右一時ニ徴収スルハ現在ノ民情ニ於
テ到底難被行故ニ年賦納付ト
不足ノ分ハ欠損ノ分
右及答申候也

議長野村道安殿

鳴司野村道安